菅原道真の荘子引用

――流離という境遇の中で――

佐藤信一

はじめに

菅原道真による荘子引用を考察して行く。一体荘子とは如何なるものか。伝来[注1]は古く、推古天皇の十二年（六〇四）に聖徳太子が選定した『十七条憲法』[注2]の第五条に「絶レ餐棄レ欲」とあるのは、『荘子』[注3]「胠篋」の「絶レ世棄レ知」に拠るもの（これは『老子』「還淳第十九」に「絶レ聖棄レ智」とする）、また第十条に「彼是則我非」とあるのは、『荘子』「斉物論」の「欲レ是二其所レ非、而非二其所レ是……」とある例が挙げられる。また、『経国集』[注4]巻二十所収の白猪広成の対策文に「對。竊聞。眷二山林一以被二黄緇一。道徳之玄教也。……竊以。玄以二獨善一爲レ宗。無二愛敬之心一。[注5]棄レ父背レ君。」と道教が否定的に描かれている。『本朝文粋』巻三所収の春澄善縄の対冊、六九「神仙」の「道引傳二長生之術一」は『荘子』「刻威」の「吹呴呼吸、吐レ故納レ新、熊經鳥申、為レ壽而已矣。此道引之士、養レ形之人、彭祖壽考者之所レ好也。」に基づく表現である。また、これは諸注に指摘はないが、七一「漏剋」の「無レ愆二天地之心一」に、『荘子』「徐無鬼」の「以應二天地一之情而勿レ攖。」という類似した表現が見られる。『日本国見在書目録』[注6]には「荘子廿巻梁漆園吏荘周撰後漢司馬彪注」、また「荘子卅三巻郭象注」などと、司馬彪や郭象が注したものなど、二十一の関係書を挙げる。

夙に川口久雄氏は、後述の『菅家後集』[注7]所収の五〇四「官舎幽趣。六韻。」の補注で「荘子の、死生を一とし、差別を超越する思想が、悲運の道真の心の支えとなったふしがある」と指摘する。

ところで、道真以前の荘子引用の在り方に関して、島田忠臣の場合は金原理氏に指摘がある。[注8]そこでは「いわゆる経書の学を修めた宮廷官僚の典型というタイプには収まりきれない幅と深さを看取できる」とされている。それは具体的には「伝統的な儒教思想と一見相容れない老荘思想、とくに『荘子』に対する深い理解と一方で仏教への傾斜」であるとしている。

さて、福島正義氏は、「菅原道真の作品と老荘思想の一端」[注9]で、道真の「菊」への愛好は陶潜、陶淵明に拠るが、陶淵明自身も老荘に傾倒したからであり、荘子の死生を一として差別を超越する思想が、非運の道真の心の支えとなったとする。さらに福島氏は、「菅原道真の作品と老荘思想」[注10]で『菅家文草』、

『菅家後集』におけるすべての老荘の引用箇所を検討した上で、道真に於ける老荘思想の影響の持つ意味が、極めて大きかったことを論じている。

一

そもそも、道真に於ける荘子の位置づけとは如何なるものであったか。それを見るために『菅家文草』及び『菅家後集』での用例を一覧してみよう。もちろんこれは全ての用例を網羅することを目指すものではない。注釈のレベルで指摘されているものに留まるものである。

巻二、一一七「夢二阿満一。」一三・一四句に「萊誕含レ珠悲二老蚌一、荘周委レ蛻泣二寒蟬一」とあるが、伝記レベルの故事として『史記』[注11]「老子韓非子列伝」に「姓李氏、名耳、諡曰聃。或曰、老萊子亦楚人也」とある例が指摘でき、注に「正義曰、太史公疑二老子或是老萊子一。」とある。また『荘子』「知北遊」に「舜曰、……性命非二汝有一、是天地委蛻也。」とあるのにも、脈略が見出されよう。

同じく巻二、一六一「灘聲。」の七・八句の「此夕無二他業一、荘周第一篇」は、静かな瀧の音を聞いている場に相応しいのは『荘子』第一篇の「逍遙遊」であろうとするもの。

巻三の「舟行五事」に関しては後述することにしたい。

また、巻四巻末、三三三「北溟章」、三三四「小知章」、三三五「堯譲章」の三首は「逍遙一篇之三章」を解説したもの。藤原克己氏は、「詩人鴻儒菅原道真」[注12]で、巻四掉尾の「北溟章」、「小知章」、「堯譲章」(三三三～三三五)を採り上げて、道真における『荘子』、とりわけ郭象注の意味を指摘する。それによれば、「『荘子』逍遙遊篇に見えるところの超然と天空高く遙かに飛翔する巨大な鵬と、彼を見て嘲笑する小虫小鳥の蜩・学鳩も、また、儒教的理想の聖人堯と、彼に天下を譲られんとしてこれを一蹴した荘子的隠者許有も、郭象注では皆、銘々が銘々の天性・天分に自得し逍遙している点において一致している」とあり、郭象注の荘子解釈が道真に取り入れられている意義を考察している。藤原克己氏は、さらに「世路難と風月」[注13]で「郭象のいわゆる〝逍遙一致〟思想を敷衍して詠んだ」ものと指摘する。郭象は晋の河南の人。字は子玄。老荘の学問に通じ清言をよくしたことで知られる。三一二年頃に没した。その注するところの郭象注とは、平安時代にもっとも一般的な『荘子』のテキストであったとされている。荘子の思想の特徴の一つに「無為」があるが、福永光司氏[注14]「郭象の荘子解釈―主として「無」「無為」「無名」について―」に拠れば、「郭象においては無為とは何もしない事ではなくて一切を肯定する事であったという。さらに福永氏は「郭象の荘子解釈(完)―主として「無」「無為」「無名」について―」[注15]で「郭象は荘子が個人の主体的な立場で追求した究竟的な人間の在り方を、彼の社会的な関心と彼の時代の政治的要請の中で新しく性格づけてゐる」として、また「郭象の『荘子注』―郭象窃盗説についての疑問―」[注16]で、郭象の独自性を「訓詁章句の学においてよりも、荘子の思想そのものを全体として把握し、それを彼自身の主体性において哲学体系として把握しようとする努力」に見出されるとする。ところでこの郭象の「『注』という

体裁を借りた彼の哲学の表現手段でさえあった」（「郭象の『荘子注』と向秀の『荘子注』―郭象窃盗説についての疑問―」）とされる学問に対する姿勢から想起されるのは、詩の中に人生を表現しようと試み続けた道真の生き方ではないだろうか。

『菅家後集』四八四「敍意一百韻。五言。」の、九七・九八句に「老君垂レ迹話、荘叟處レ身偏」と、老子と一対で描かれる用例がある。ただそこでも「殷勤齊物論、洽恰寓言篇」と『荘子』の章の名「齊物」、「寓言」とが対句となって叙述されている。荘子の方により重点が置かれていると言えないであろうか。さらに続く九九句「還致幽二於夢一」とするが、ここから想起されるのは荘子が夢で蝶になったという『荘子』「齊物論」に見られる故事（「昔荘周夢爲二胡蝶一」）ではないだろうか。

二

ここで『菅家後集』の一つの詩の場合を考えてみたい。

504 官舍幽趣。六韻。

堺中不得避誼譁　堺中誼譁を避くることを得ず
遇境幽閑自足誇　境に遇へる幽閑自ら誇るに足る
秋雨濕庭潮落地　秋雨庭を濕ほす潮の落つる地
暮煙縈屋潤深家　暮煙屋を縈る潤びの深き家
此時傲吏思荘叟　此の時傲吏荘叟を思ふ
隨處空王事尺迦　處に隨ひて空王尺迦に事ふ
依病扶持藜舊杖　病に依り扶持す藜の舊りたる杖
忘愁吟詠菊殘花　愁を忘れて吟詠す菊の殘れる花
飡支月俸恩無極　飡は月の俸に支へられて恩極まり無し
衣苦風寒分有涯　衣は風の寒きを苦しみて分涯り有り
忘却是身偏用意　是の身を忘却して偏に意を用ゐれば
優於誼舍在長沙　誼の舍の長沙に在りしよりも優れたらむ

初句の「堺中」は、太宰府の条里制の内部のこと。そこにいては、人々のかまびすしさを避けられない。「誼譁」はやかましいこと。『白氏文集』[注17]巻十三、〇六〇八「代レ書詩一百韻。寄二微子一」に「殘席誼譁散、歸鞍酩酊騎」とある。

二句の「幽閑」は、静かで奥深いこと。また、そのさま。『白氏文集』巻六十六、三二四八「老來生計」に「人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深」とあるのに拠るもの。これは『和漢朗詠集』巻下「閑居」にも収められる。この他に巻二、〇〇七一「續古詩十首（七）」の「我本幽閑女、結レ髪事二豪家一」、巻八、〇三七〇「翫二新庭樹一。因詠二所懷一」の「偶得二幽閑境一。遂忘二塵俗心一」、巻九、〇四〇四「別二元九一後詠二所懷一」の「悠悠早秋意。生二此幽閑中一」、巻一五、〇九〇八「東南行一百韻。」の「軟美仇家酒。幽閑葛氏妹」、巻十六、〇九二三「北亭招レ客」の「疎散郡丞同二野客一。幽閑官舍抵二山家一」、巻六十三、三〇四九「秋涼閑臥」の「幽閑竟二日臥一。衰病無二人問一」等の用例が検索できる。なお、この「官舍幽趣」の「幽閑」を「自足レ誇」とすることを、福島氏は「荘子的の口吻」、「淵明の境地そのもの」とする。[注18]だとすれば、五句の「此時傲吏思二荘叟一」以外にも『荘子』引用が認められることになろう。

次の「秋雨濕レ庭潮落地」の参考に大系は道真の『菅家後集』四八四、「敍意一百韻。五言」の一九一・一九二句「璅璅黄茅屋、荒荒碧海壖」を指摘する。

「暮煙縈レ屋潤深家」は「潤」に本文上の問題がある（底本の尊経閣文庫本では、「潤」に作る）が、大系の校訂に従う。ここは配所の湿潤な気候を詠じたもの。

「此時傲吏思二莊叟一」とある「傲吏」は、勝手なことをする役人、「莊叟」は莊子のこと。ともに莊子の謂いであろう。「傲吏」であった「莊叟」を道真が思っているのである。『史記』「老子韓非子列伝」に「莊子者、蒙人也。名周。周嘗爲二蒙漆園吏一。與二梁惠王・齊宣王一同レ時。其學無レ所レ不レ闚、然其要本二歸於老子之言一。故其著書十餘萬言、大抵率寓言也。……無レ為二有レ國者所一レ羈、終身不レ仕、以快二吾志一焉。」とある。「其の學闚ざるの所無し」と評価もしているのであるが、結局のところ『史記』は、『莊子』を「寓言」、架空のものがたりとしている。

莊子を傲吏と描いたものに『文選』[注19]巻二十一にも収める晉郭璞の「遊仙詩」には、「漆園有二傲吏一、萊氏有二逸妻一」とあり、『白氏文集』巻十三・〇六六七「秘書省中憶二舊山一」の「猶喜蘭臺非二傲吏一、歸時應レ免レ動二移文一」なども、先例として挙げられる。

次の句「隨處空王事二尺迦一」の「空王」は、仏の異称。『法華経』[注20]「授学・無学人記品」に「諸善男子。我與二阿難一等。於二空王佛所一。同時發二阿耨多羅三藐三菩提心一。」とある。『白氏文集』巻十八・一一一一「郡齋暇日、憶二廬山草堂一、兼寄二二林僧社一三十韻。多叙二貶官一、已來二出處一之意。」に、「不レ堪レ匡二聖主一、只合事二空王一」とあり、『白氏文集』巻十九・一二五九「新昌新居書事四十韻。寄二元老中張博士一」に「大底宗二莊叟一、私心事二竺乾一」とある。このように帝王の招きも身が汚れるとして仕官を断った莊子の故事が、道真の脳裏に去来していたであろう。そのことは福島氏の指摘にある。[注21]しかし、この時の道真の置かれた立場は、仕官を拒絶した莊子とは全く異なる。その莊子と敢えて自らの拙い運命と重ねることで、その定めの救いのなさを叙述しているのではなかろうか。

「依レ病扶持藜舊杖」の「藜杖」はあかざ製の杖。大系は補注で『漢書』巻三十六「劉向傳」の「老人有り、黄衣して青き藜の杖を植てて、閤を叩いて進む」を引くが、検出し得なかった。ただ、『晉書』巻四十三「山涛傳」に「魏帝嘗賜二景帝春服一、帝以賜レ涛。又以二母老一、並賜二藜杖一枚一。」とあるのは、「母」の「老」でもって、「藜杖」を賜った例である。この山涛とは竹林の七賢の一人であり、老莊思想とも関わりがあったであろう。

また陶淵明の影響を受けた王維が「菩提寺禁口号示二裴迪一」で「悠然策二藜杖一、歸向桃花源」と「藜杖」を詠んでいることは福島氏が指摘する。[注22]

次に、「忘レ愁吟詠菊殘花」とあるが、この詩のように「菊」が憂いを忘れさせるとする表現の先蹤には『文選』巻三十、陶潛「雜詩二首（二）」「秋菊有二佳色一、裛レ露掇二其英一、汎此忘二憂物一、遠我達二世情一」があり、これを踏まえていると見てよかろう。[注23]ただ、福島氏も指摘するように、陶潛、陶淵明が自然

に憧れ、隠遁生活に入ったのにも、荘子の影響を考えざるを得ないであろう。その点で陶淵明の影響も、間接的な荘子引用と見るべきかもしれないが、やはり両者には一線を画しておくべきだろう。

次の「飡支二月俸一恩無レ極」は、食事が月俸によってまかなわれていた事への感謝の念を表す。『白氏文集』巻十二、五八〇「王夫子」に「月俸猶レ堪レ活二妻子一、男兒口讀二古人書一」とある。

また「衣苦二風寒一分有レ涯」の「有レ涯」は、限りがある、果てがある、の意。指摘はないが『荘子』「養生訓」冒頭「吾生也有レ涯、以レ有レ涯隨レ無レ涯、殆已。已而爲レ知者、殆而已矣」に基づく表現ではないか。この故事は「郭注」に「所レ稟之分各有レ極也。」、「稟」は与えるの意、各々の与えられた定めには極まったところがあるとあり、この『荘子』「養生訓」冒頭は、限りある寿命でもって限りない知識を求める意と解することが出来よう。またこの「郭注」の「有レ極也」から想起されるのは前の句の「無レ極」なのである。まさに道真が当時置かれていた状況に見合うものではないだろうか。またこの詩の、第五句で「此時傲吏思二莊叟一」と、荘子が詠み込まれていたこと、また「遇レ境幽閑自足レ誇」の「幽閑」を「自足レ誇」としていたこと、さらに「隨處空王事二尺迦一」で荘子が帝王の招きを拒絶する故事を用いていたことが想起される。このように、幾重にも荘子の引用が織り重ねられているのである。

大系は、結句の「誼舍在二長沙一」が『文選』巻十三「鳥獸」所収の「鵩鳥賦并レ序」を作った賈誼の故事を指すとする。賈誼は李善注『文選』所引の『漢書』に「賈誼洛陽人也。年十八屬レ文。稱二於郡中一。河南太守吳公聞二其秀才一、召置二門下一。甚幸愛後、文帝召爲二博士一。……」とする。その辿った生涯は、さながら道真のそれと等しい。「鵩鳥賦」の序文に「誼爲二長沙王傅一。三年有二鵩鳥一。飛二入誼舍一。止二於坐隅一。鵩似レ鴞不祥鳥也」とするものの李善注に、「漢書云、誼爲二長沙王太傅一三年、鵩入二誼舍一、又云、後歲餘文帝思レ誼。徵拜爲二梁王傅一。然文帝之世王二長沙一者唯有二吳芮之子孫一耳。經史不レ載二其謚號一。故難レ得而（不）詳也。……」とする。また同じく「鵩鳥賦」の序文、「誼既以謫二居長沙一」や「長沙卑濕。誼自傷悼。以爲壽不レ得二長栖一。爲賦以二自廣一」といった姿は道真の置かれた境遇さながらであると思しい。道真は賈誼の文帝に召されて博士となりながら長沙に流された故事に、自分の運命と似たものがあると感じて引用したのではなかろうか。

つまり、この「官舍幽趣。六韻。」の引用には二本の柱があると思われる。一つは荘子の引用であり、今一つは賈誼の故事の引用である。そして賈誼の引用はこの詩に留まるのであるが、いくども繰り返されてきた荘子の位置付けは、道真の中でより重いもののように思われる。

三

ところで、この「有レ涯」、また「無レ涯」に類すると思われる表現が菅原道真の他の作品にいくつか見出される。それらとの比較を通じて道真における『荘子』引用の意味を考えてみよう。

最初は巻三、二三六「舟行五事」(三)である。この五首は、その第一首、第三首、第四首に明らかな荘子引用が見られる。

第一首は、舟から見える「一株磯上松」に託して、「一株」と道真の孤独を詠み上げる。それは道真自身の心象風景と言えるものであろう。大系で、十一句「雖レ遭二班爾匠一」に、『荘子』「人間世」「徐無鬼」の「匠石」が投影していることを指摘する。「匠石」は、大工の名。福島氏は『荘子』「山木篇」の「荘子行二於山中一、見二大木枝葉盛茂一、伐レ木者止二其旁一而不レ取也。問二其故一曰、無レ所レ可レ用。荘子曰、此木以二不材一得レ終二其天年一。」が背景にあるとする。[注24] 福島氏は道真の「自分は文章(ここでの「文章」とは、あや、の意。佐藤注)ある木たらんことを避けて、文章なき磯のほとりの孤松に倣ひて天性を全うしたし」と「道真の全性保身を強調」するものと見ている。だがここはむしろ、『荘子』「人間世」に「匠石之レ齊……已矣、勿レ言之矣。散木也、以為レ舟則沉、……是不材之木也、無レ所レ可レ用、故能若レ是之壽。」とある故事を用いるのではないだろうか。この故事は人間の役に立たないがために天寿を全うできる樹木を賞揚するもの。道真は有意の自分が活躍できない現状を象るのに、いわば逆の意味でこの故事を用いていると言えるであろう。人間の役に立つ樹木、つまり道真には天寿を全うすることはできないであろうことを述べている。

第二首は、白髪頭の老人が釣り針を失ったがために、漁を止めざるを得ず、漁労以外のことは何も出来ない老人に、学問しかできない自己の境遇を引き比べる。道真は、地方官の実務ではなく、学問を究めたかったのである。末尾の聯で「漸憶釣翁泣、悲二其業不一終」(「漸く釣翁の泣くを憶ふ、其の業を終えざるを悲しむなり」)と、道真の置かれた状況を叙述しているのにも、道真の思いが表れていよう。ところで、この「釣」、つりばりを失うという話柄は、『荘子』「田子方」に「文王觀二於臧一。見二一丈夫釣一。而其釣莫レ釣。非下持二其釣一有レ釣者上也、常釣也。」、釣り針を付けずに魚を釣ろうとしているとあるのを踏まえるのではないか。

もちろん、これに類似した、釣りをしていて自適している賢人を登用したという話として、『呂氏春秋』[注25]「首時篇」の太公望呂尚の「太公望。東夷之士也。欲レ定二一世一。而無二其主一。聞二文王賢一。故釣二於渭一以觀レ之。……」や、『史記』「齊太公世家」の「呂尚蓋嘗窮困、年老矣。以二漁釣一、奸二周西伯一。西伯將二出獵一、卜レ之。曰、所レ獲非レ龍、非レ彲、非レ虎、非レ羆、所レ獲霸王之輔。於レ是周西伯獵。果遇二太公於渭之陽一。與語大説曰、自二吾先君太公一曰、當下有二聖人一適上周。周以興。子真是邪。吾太公望二子久矣。故號レ之曰二太公望一。」がある。ただ何れにも「釣」を失う話柄は見られない。これは『荘子』に拠るものであろう。

第三首は、全文を引用する。

舟行五事 (三)

區區渡海覺　區區たり海を渡る覺
吐舌不停蹄　舌を吐きて蹄を停めず
潮頭再三顧　潮頭をば再び三たび顧みる
如戀故山谿　故山の谿を戀ふるが如し

故山何戀切
母鹿每提携
適遇獠徒至
分奔道路迷
呼聲喧左右
流鏃雨東西
母子已相失
死生永相睽
茫茫不測水
豈是毛群栖
淼淼無涯浪
未曾野獸蹊
何福鷃巢藪
何分龜曳泥
客有離家者
看麑灑血啼

故山何ぞ戀ふることの切なる
母の鹿は毎に提携せり
適ま獠の徒の至れるに遇へば
分奔して道路に迷へり
呼ぶ聲左右に喧し
流鏃東西に雨ふる
母と子と已に相ひ失ふ
死と生と永く相ひ睽けり
茫茫たり測らざる水
豈に是れ毛群の栖ならんや
淼淼たり涯り無き浪
未だ曾て野獸の蹊ならず
何の福ぞ鷃の藪に巢くふこと
何の分ぞ龜の泥を曳くこと
客に家を離るる者有り
麑を看て血を灑きて啼く

ここでは「麑」、鹿の子供を語ることで、道真は己の哀しみを象っている。海を渡る子鹿は、二句三句で「吐レ舌不レ停レ蹄、潮頭再三顧」と、写実的に描かれている。以下、道真は子鹿の心情を忖度しながら、母子の別れに焦点を当てている。そして末尾で「客」に「離レ家者」がいる、「麑」を見て「灑レ血啼」としている。

ところでここにも、『荘子』が引用されている箇所がいくつか大系で指摘されている。この「龜」が「曳レ泥」くとする叙述が、『荘子』「秋水篇」の「此龜者寧其死爲二留レ骨而貴一乎、寧其生而曳二尾於塗中一乎」に拠る叙述であること、またそれに関連して「鷃」が、同じく『荘子』「秋水篇」の「鴟」という鳥、「南方有レ鳥、其名鵷鶵、子知レ之乎。夫鵷鶵發二於南海一、而飛二於北海一。非二梧桐一不レ止、非二練實一不レ食、非二醴泉一不レ飲。於レ是鴟得二腐鼠一、鵷鶵過レ之、仰而視レ之曰、嚇。……」、つまり梧桐でなければ留まらなかった鵷鶵に対して自分の腐った鼠の死骸を取られると勘違いして威嚇した鳥、鴟に相当するとされている。ところで、福島氏[注26]はこの「鷃」に『荘子』「逍遙遊」の「有レ鳥焉。其名為レ鵬。背若二泰山一、翼若二垂天之雲一。摶二扶搖一羊角而上者九萬里。絕二雲氣一負二青天一、然後圖レ南、且レ適二南冥一也。斥鴳笑レ之曰、彼且二奚適一也。我騰躍而上、不レ過二數仞一而下、翱二翔蓬蒿之間一。此亦飛之至也。而彼且二奚適一也」を挙げて、現実世界のさまざまな桎梏を超越して、大自然に抱かれてこそ人間は幸福になることが出来るという「逍遙遊」の精神が投影していると説く。そして「社会的なる拘束を脱して一途に生命の自由を希求したる道真の感」を読みとるのであるが、はたして道真が「無用を以て天寿を全うする無為自然の生き方」を希求していたのかには疑問が残らざるを得ない。道真にとっての『荘子』引用とは、より主題的なものだったのではないだろうか。

さて、その箇所の、少し前の部分であるが、「淼淼無レ涯浪」に先程指摘した『荘子』「養生訓」冒頭「吾生也有レ涯、以レ有レ涯隨レ無レ涯、殆已。已而爲レ知者、殆而已矣」の投影を見て取れるのではないだろうか。もちろんここは単に「浪」の形容で

あるから『荘子』にまで考えを及ぼすことはないかもしれない。しかし、寄せては返す波の果てしない動きに、道真は『荘子』の世界、あるいは永遠の時間を見ていたのではなかったか。

後の二首にも簡単に触れておきたい。

第四首に関しては、初句の「不レ繫舟」に、大系は『荘子』「列御寇」の「汎若二不レ繫之舟一、虛而敖遊者也。」を指摘する。また、福島氏は同じ箇所であるが「巧者勞而知者憂、無レ能者無レ所求、飽レ食而敖遊、汎若二不レ繫之舟一、虛而敖遊者也。」、及びそれに付された『南華真經注疏』の「疏、夫物未二嘗爲一、無用二憂勞一、而必以二智巧一困弊。唯聖人汎然無レ係、泊爾忘レ心、譬二彼虛舟一、任レ運逍遙。」を引いて「慾に充ちてあれば、失敗破滅し、それ等の拘泥を離れざれば逍遙自適の境致に到り得」ないことを詠むとする。[注27] だが、その説は唐成玄英の『南華真經注疏』によるものである。『日本国見在書目録』[注28]に「荘子疏十「巻」西華寺法師成英撰」とあるのが、『南華真經注疏』であろうかと考証されている。ところで『日本国見在書目録』には「荘子卅三「巻」郭象注」とあり、明らかに郭象注が入っていたことが知られるのである。このことから考えるとこの表現には、『荘子』「逍遙遊」「而我猶代レ子、吾將レ爲レ名乎。名者實之賓也。吾將レ爲レ賓乎」に附せられた郭象注「夫自任者、對レ物而順レ物者。與レ物无レ對。故堯无レ對二於天下一。而許由與二稷・契一爲レ匹矣。何以言二其然一邪。夫與レ物冥者。故羣物之所、不レ能レ離也。是以レ无二心玄一應二唯感一之。從汎乎若二不レ繫之舟東西之非一レ己也……」とある「不レ繫之舟」が投影しているとも、考えられるのではないか。心に玄いところがなく、すべてのもの（羣物）が離れられないものであることを感じている。その不安定に浮かんでいる様は繫がれていない舟が東に西に無自覚に漂う姿さながらである、とする「不レ繫舟」が投影しているのではないか。塩の商いを企てたが嵐にあって舟が難破した老人を詠む。「十倍利」を求めながら、「一生謀」を失ったとする。また「虛舟似二放遊一」の「虛舟」も先程の郭象注「不レ繫之舟」を投影させて解釈してもよいかもしれない。また先程触れたが、末尾の聯に「始終雖レ不レ一、請レ我學二荘周一」とあり、明らかに荘子を引用する。ところでこの聯に、福島氏は、『荘子』「田子方」の「消息滿虛、一晦一明、日改月化、日有レ所為、而莫レ見二其功一。生有レ所二乎萌一、死有レ所二乎歸一、始終相二反乎無端一、而莫レ知二乎其所レ窮。非レ是也、且孰為二之宗一。」の影響を指摘するが、[注29]「始終」が共通するのみであり、これは採らない。

次の第五首は断食する僧の欺瞞を嘲笑うかのような作である。「聞二其長斷食一、虛号遍相稱」と、予めその僧の評判を「虛号」としているのである。そして「我將レ知二實不一、試擲二米三升一」（「我將に實不を知らむとして試みに米三升を擲」）げうってみた。すると僧は「納受即言曰、施主誠足レ憑、今朝如不レ遇、屍偃遂無レ興」（「納受して即ち言ひて曰はく、施主誠に憑むに足れり、今朝如し遇はざれば、屍偃れて遂に興くること無からむ」）米を受け取って即座に言うことには、あなたさまの誠意はたのむにたりる。もし今朝遇わなかったとしたら、私の屍は倒れてとうとう起きあがることも出来ますまい。これはまさに俗物たる僧侶の言い分ではないか。道真もこの俗臭ぷんぷんの僧侶には「嗷嗷閭巷犬、當レ吠二此僧朋一」（「嗷嗷たる閭巷の犬、

當に此の僧朋を吠ゆるべし」）と、犬をけしかけている。この詩の平明な叙述は、荘子よりもむしろ白詩の影響に拠るものであろう。

四

最後に文章に於ける『荘子』と関連を持つと思われる「涯」の用例として、巻七に収める「秋湖賦」を見ておこう。

515 秋湖賦。（以二秋水無レ岸爲レ韻。二百字以上成レ篇。）

有レ客在二湖頭一。日惟西暮、年也季秋。策二回頽之羸馬一、嗤二不レ繫之虛舟一。於レ是商飈瑟瑟、沙渚悠悠。掬二波浪一以清レ心、不レ求二斗藪一。望二郵亭一以問レ宿、何暇枕レ流。雖レ云二行路之艱澁一、誠是卒レ歲之優遊。觀夫物无二二理一、義同二一指一。其爲レ性也、潤下克柔、其爲レ德也、靈長爰止。感因レ事而發、興遇レ物而起。有二我感之可レ悲秋、无二我興之能樂一。況復霽而雲斷、天與レ水俱。窺二潛魚一以漁火疊、逐二歸鳥一以釣帆孤。山影倒穿表二裏千重之翠一、月輪落照高二低兩顆之珠一。勝趣斯絶、風流既殊。世間希有、天下亦无。嗟呼、意不二相忘一、憂須二以散一。敍二旅思之所二邊涯一、喩二湖水之无二涯岸一者也。

秋湖賦。（秋水岸無きを以て韻と爲す。二百字以上を篇と成す。）

客有り湖頭に在り。日惟れ西に暮れ、年や季秋なり。回頽の羸馬に策ち、繫がざるの虛舟を嗤ふ。是に於て商飈瑟瑟たり、沙渚悠悠。波浪を掬ひて以て心を清め、不求斗藪を求めず。郵亭を望んで以て宿に問ふ、何の暇ありてか流れに枕せむ。行路の艱澁を云ふと雖も、誠に是れ歲を卒ふるの優遊なり。觀れば夫れ物に二理无く、義は一指に同じ。其の性爲るや、潤下克く柔にして、其の德爲るや、靈長爰に止まる。感は事に因りて發し、興は物に遇ひて起る。我が感ひの秋を悲しむべき有り、我が興の能く水を樂しむこと无し。況んや復た霽れて雲斷え、天と水と俱はれり。潛魚を窺ひて以て漁火疊み、歸鳥を逐ひて以て釣帆孤なり。山影倒れて穿ち千重の翠を表裏にす、月輪落ちて高低兩顆の珠を照らす。勝趣斯れ絶え、風流既に殊なり。世間希に有り、天下亦无し。嗟呼、意相忘れず、憂は須く以て散ずべし。旅思の邊涯とする所を敍べて、湖水の涯岸无き者に喩ふるなり。

『荘子』に出典を持つ言葉が散見される。例えば「嗤二不レ繫之虛舟一。」は、『荘子』「逍遙遊」「而我猶代レ子、吾將レ爲レ名乎。名者實之賓也。吾將レ爲レ賓乎」の郭象注「……若二不レ繫之舟一……」、あるいは『荘子』「列御寇」「汎若二不レ繫之舟一、虛而遊遨遊者也」に基づく表現であろう。金原理氏は、「道真の賦―「秋湖賦」試読―」で、白居易の『白氏文集』巻六、二三六「適意二首（一）」の「……一朝帰二渭上一、泛如二不レ繫舟一、置二心世事外一、無レ喜亦無レ憂……」の方を引用すると見なすことで「宮仕えの束縛から解放されて渭水の辺で気ままな生活を享受していると詠う、この白詩のような境地」に到っていると見ている。[注30] ただ、ここでは「虛舟」と否定的に叙述されているの

であって、『荘子』引用は動かせないのではなかろうか。さらに言えば、道真は「不レ繫之虚舟」を「嗤」っているのである。「嗤」とは柿村重松氏が『後漢書』「隗囂傳」の注「嗤笑也」を引くが、嘲笑うの意であろう。この「秋湖賦」は製作年代が明らかではないが、川口氏によって、讃岐守時代の末に「秩満の期が近づいて、文章博士時代の気分がよみがえって、ことさら賦を試作する気もちになったのであろう」と推定されている。だとすれば、この時、京都に帰るという希望に満ちていたであろう道真は荘子の「虚舟」を、かえって否定的に捉えているのである。なお、この表現が道真に限らず、岳父嶋田忠臣の『田氏家集』にも見られる（「病後閉座偶吟所懐」の「天教方寸虚舟似」、「秋日諸客會歌賦屏風一物得舟」の「我來唯受對虚舟」）ことは焼山廣志氏が「菅原道真作品研究―「秋湖賦」注釈―」で既に指摘するところである。[注31] 今後は各々の表現の比較検討が求められよう。

また「觀夫物无二理、義同一指。」というのも『荘子』「齊物論」「天地一指也、萬物一馬也」の影響が夙に柿村重松氏によって指摘されている。[注32] 金原氏はこの引用を認めた上で郭注の「浩然大寧而天地万物各當其分。同於自得而無レ是無レ非也」とある「天地万物皆是非の差別のない同一物であると解する」としている。[注33]

さらに「敍旅思之所邊涯、喩湖水之无涯岸者也。」とされている。ここに見る「邊涯」とは、かぎり、の意。元好問「乙酉六月十一日雨」に、「良苗與新穎、鬱鬱無邊涯」とあるのは、時代が降りすぎるため、道真の表現を考える参考にはならないが、挙げておく。また、ここでの「涯岸」は、水の岸、かぎり、の意。庾信「哀江南賦序」に「江淮無涯岸之阻、亭壁無藩籬之固」とある。ここでは「旅思」の叙述と密接に連関している「邊涯」、ならびに「涯岸」が見て取れるのではないだろうか。秋の湖を叙述するのに、限りない無限の空間が描かれていると言えよう。そしてその背後には『荘子』の世界があるのではないだろうか。

このように「不レ繫」の「舟」と「涯」を詠んだ詩の用例として、「生涯」とする例であるが、元稹の「酬許五康佐（次用本韻）」の「枯涸方窮轍、生涯不繫舟。」が挙げられる。

五

ここで今まで論じてきたことをまとめておこう。道真は、『荘子』の深い影響を受けている。それは、字句の類似のみならず、荘子の批判精神を継承したと言うことではないか。

今回は道真の用いる「涯」という語のいくつかが、『荘子』「養生訓」冒頭「吾生也有レ涯、以レ有レ涯隨レ無レ涯、殆已。已而爲レ知者、殆而已矣」に基づく表現ではないかと探ってきた。道真の「涯」の中には『荘子』「養生訓」の「涯」と脈略のある用例がいくつか見られた。

もちろん道真の詩文には今回取り上げなかった「涯」の用例、荘子と全く拘わらないものもあり、その点では恣意的な読みであるとの譏りを免れないかもしれない。ただ、「涯」と言えば無前提に荘子に直結する、と言った方法は道真の潔しとするところではなかったであろう。道真の詩語に対する感覚は、私た

ちが考える以上のものであったろう。そのことばが用いられる場面場面で違った意味合いを見せる、それが道真にとっての詩語だったのではあるまいか。

注1　以下の記述は近藤春雄氏『日本漢文学大事典』（昭和六〇年三月、明治書院刊）の「老荘と国文学」の項目を参考にした。

2　『十七条憲法』の本文は、家永三郎・藤枝晃・早島鏡正・築島裕氏校注の『日本思想大系　聖徳太子集』（昭和五〇年四月、岩波書店刊）に拠る。ここで挙げた老荘の影響に関しても、すでにそこで指摘されている。

3　『荘子』、及び『老子』の本文は、阿部吉雄・山本敏夫・市川安司・遠藤哲夫氏訳注、新釈漢文大系『老子・荘子』（昭和四一年一〇月、明治書院刊）に拠る。なお『荘子』の郭象注の本文は、北原峰樹氏編『荘子郭象注索引』（平成二年、北九州中国書店刊）に拠る。

4　『経国集』の本文は、群書類従に拠る。

5　『本朝文粋』の本文は、大曽根章介・金原理・後藤昭雄氏校注、新日本古典文学大系『本朝文粋』（平成四年五月、岩波書店刊）に拠る。なお、注釈に関しては、柿村重松氏『本朝文粋註釈』（大正一一年四月、冨山房刊）を参観した。

6　『日本国見在書目録』の本文は、矢島玄亮氏『日本国見在書目録―集証と研究―』（昭和五九年九月、汲古書院刊）に拠る。

7　『菅家後集』、及び『菅家文草』の本文は、川口久雄氏校注日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（昭和四一年一〇月、岩波書店刊）に拠る。

8　「嶋田忠臣と『荘子』」（『詩歌の表現―平安朝韻文攷』平成一二年一月、九州大学出版会刊、初出は『源氏物語とその周縁』一九八九年六月、和泉書院刊）。

9　『日本大学漢学研究』（二〇号。昭和五八年二月）。

10　『日本上代文学と老荘思想』（昭和五八年一〇月、高文堂出版社刊）

11　『史記』の本文は、小沢利忠氏訳注、新釈漢文大系『史記』（平成二年二月、明治書院刊）に拠る。

12　『菅原道真と平安朝漢文学』（平成十三年五月、東京大学出版会刊）、初出は「平安朝の知識人」（『講座日本思想2　知性』昭和五八年、東京大学出版会刊）。

13　『菅原道真と平安朝漢文学』（平成十三年五月、東京大学出版会刊）、初出は『白居易研究講座』第五巻（平成六年九月、勉誠社刊）

14　『哲学研究』（三七巻二冊、四二四号、昭和二九年六月）。

15　『哲学研究』（三七巻三冊、四二五号、昭和二九年七月）。

16　『東方学報』（第三十六冊、昭和三九年一〇月）。

17　『白氏文集』の本文は、那波道圓本を底本にした『白氏文集歌詩索引』（平成元年一〇月、同朋社刊）に拠

る。

18 福島氏注9を参照のこと。

19 ここでの『文選』の本文は、小尾郊一氏訳注、全釈漢文大系『文選（文章編）二』（昭和四九年九月刊）に拠る。

20 『法華経』の本文は、坂本幸男・岩本裕訳注の岩波文庫『法華経　中』（昭和三九年三月、岩波書店刊）に拠る。

21 福島氏注9を参照のこと。

22 福島氏注9を参照のこと。

23 福島氏注9を参照のこと。

24 福島氏注10を参照のこと。

25 『呂氏春秋』の本文は、国訳漢文大成『呂氏春秋』（大正十三年十二月、国民文庫刊行会刊）に拠る。

26 福島氏注10を参照のこと。

27 福島氏注10を参照のこと。

28 『日本国見在書目録考証』に拠る。

29 福島氏注10を参照のこと。

30 （『国文学解釈と鑑賞』五五巻一〇号一九九〇年一〇月、後に『詩歌の表現－平安朝韻文攷』九州大学出版会、平成十二年一月刊、に所収）

31 『国語国文学研究』（三三号、平成九年一二月）。

32 『本朝文粋註釈』上巻二一頁参照。

33 注30に同じ。

（本学助教授）